

## 「仏青お風呂プロジェクト・BOP」

仙台教区では仙台仏教青年会がBOPを始めます。被災者でもある仏青メンバーによるプロジェクトで、お金も人手も足りません。手伝ってくれる人、カンパ募集中です。送り先は下記。「仙台教区仏教青年会」ゆうちょ銀行18160・12965871 八一八支店(普)

「立ち上がれ自分」仏青ブログより

「山陽教区から救援物資が届いた。水用のポリタンクにゴム手袋にガスボンベ。嬉しいです。感謝。感謝。直接お会いすることが出来なかった。・・・教務職員が教えてくれた。「皆疲れ切った顔でした。」「きつと余り休まずに遠い仙台まで、急いで運んでくれたのでしょ。」改めて繋がりの中で生きていると実感。大切に有効に使わせていただきます。これで、BOPの動きもだいぶ楽になるだろう。」



一番、気になっていた原発の影響を感じるため、少し足を伸ばして、三〇km圏内へと向かう。先ほどの避難所から、五分もしないで圏内へ。通行規制も何もなく、ただぼったりと人影が消える。道路沿いの家屋には、人の気配もなく避難しているように見える。

そのまま少し走り続けると、電工掲示板には「半径二〇km圏内立ち入り禁止危険」の文字が踊る。道路が封鎖され、パトカーには防護服を着た警官。少し話を聞こうと近づくと、緊急車両の登録をしていた為、思いがけず中へ通されてしまう。

さすがに、マスクだけで中の状況を見に行くわけにもいかず、少し進んでUターンする。完全防護した自衛隊が作業している姿が見える。自衛隊が、完全防護しなければならぬ場所から十分もしない場所に、二百人以上が避難している。

ただちに健康に影響を与える値ではない、と言われても規制圏内の異常さを見てしまうと、そこからほとんど変わらない距離に避難している、普通に生活していることに違和感を覚えざるを得ない。

水素爆発が起きた時、マスクや帽子で防備して、自主避難していた

人達が、少しずつ街に帰ってくる。街が再生していくのは嬉しいが、事態が終息したから、状況が好転したから、帰ってきた訳ではない。避難生活に疲れ、放射能という言葉に慣れ、麻痺して、うやむやのまま現状を受け入れた結果なのではないかと思う。放射能は、見えないからよくわからないし怖いと言うが、見えないことの本当の恐ろしさは、何事もないかのように生活が送れることだと思う。大人たちはまだいい、でも子供たちには見えないリスクを負って欲しくないと、切に思う。

生まれた土地が、深呼吸するのもためらわれる、そんな場所になっていることが、とてもとても悲しい。

## 東日本大震災被災者支援について

真宗大谷派は、開催予定であった親鸞聖人750回御遠忌第1期法要を中止し、急きよ震災に遭われた方々に斉しく思いを馳せ、悲しみを心に刻む「被災者支援のつどい」としたことに賛同し、第七組はそのことを自分たちの課題とし、考え合う機会とすべく、団体参拝をいたしました。

私たち真宗大谷派は、くしくも、宗祖親鸞聖人の御遠忌にこのような状況を与えられました。

それはまさに、戦乱と飢饉の時代、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」と名のり、生涯をそのようなあなかの人々とともに生き抜かれた、宗祖との出会いを深めよとの、如来の思し召しと受け取らせていただくことができます。

この大災害は、誰ひとりその影響を受けない人はいないものとなります。

これから私たちは団体として、又個人として、どのような姿勢でこの厳しい状況に対処すればいいのか、混乱し、途方に暮れるものがあります。

しかし私たちに親鸞聖人という先達の生きざまが、その言

葉として脈々と750年もの間伝えられています。その言葉はこのような厳しい状況に十分に応えうる、いやこの状況にこそ一層明らかに、私たちの道筋を照らしうるものであります。

そこから導き出される具体的支援について、皆さんからのアイデア、意見を募りつつ、取り組んでいくことこそが、私たちに与えられた御遠忌のテーマであるのかもしれない。なにとぞ皆さんのご賛同ご協力をいただけますようお願い申し上げます。

光円寺より真宗大谷派と寺報で紹介した団体へ計約30万円寄付

3・17有志で募金活動、41800円難民を助ける会へ寄付

寄せられたお米、レトルトを本山へ十一日持参予定。継続して集めます。盛岡本誓寺に支援物資のバインプができました。生活用品全てにわたり、バラで良いので光円寺へ寄せていただければ、種別で集めて送ります。長期教区では姫路商店街で定期的に募金活動（山陽教区仏青）

釈明照・惟蓮

## 日本チェルノブイリ連帯基金

日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)は、1991年1月に設立されました。チェルノブイリ原発事故の影響と思われる病気が多発しているが、自国の医療だけでは救えないというロシアの友人からの SOS がきっかけでした。

実際に被災地を訪れてみると、汚染の影響は膨大な規模で測り知れず、人々の未来に暗い影を落としています。

さらに旧ソ連邦の崩壊以後の経済混乱によって医薬品、医療機器は手に入りにくく、しだいに患者が増えてくる中で治療は最悪の状態に陥っていました。日本であったならば、必要な医薬品が手に入れば、救える子どものいのちもたくさんあったのです。

わたし達は医療、物理の専門家、広く一般の方々に協力を呼びかけ、被災地ベラルーシの医療者とともに実態の調査を開始し、医療品、医療機器の供与、



医師の研修などの支援活動をしてきました。同時に俳優、歌手、写真家、画家らの協力で、日本国内へ被災地からのメッセージを伝え、被災地の人々と関わりが持てるような活動も展開しています。

原子力発電所の事故に国境はありません。被害にあってしまった人々の声を聞いて下さい。そして共に支えあっていきませんか。

口座番号 005560・5・43020 口座名：日本チェルノブイリ連帯基金

\*ずっとチェルノブイリの支援をしてこられた日本の人たちが、今度は国内の救援に。チェルノブイリとのつながりのなかで、この原発事故がどのようなものであるのか、どのように受け止めて行けばいいのかを伝えて下さっています。「かまたみのるオフィシャルブログ」で原発事故1〜150更新中 創設者鎌田實さんは医師、「がんばらない」著者

たくさんの方が亡くなった。

たくさんの方が傷ついた。

大切な人や、大切なものを失った。

ぼくたちは、どこで 間違ってしまったんだろう。

悲しくて、悲しくて 立ちすくみそうだ。

それでも、立ち上がるしかない。

東北は、ぼくをひろって育ててくれた、父のふるさと

東北のために働きたい

何ができるか分からないけれど、

一つづつ丁寧に、自分の経験や能力を

出しきるしかない。

太陽は沈んでも、明日必ず昇ってくる (かまたみのる)